

# 大田直子さんの早世を悼む

木村 浩  
(城西大学)

「氷山の一角」と言う。残余の大部分は水面下にあって、その大きさや形状は測り知れない。このことは大田さん場合についても言い得よう。私がかつて知っていた大田さんは、まさに「氷山の一角」であった、という思いが強い。

大田さんと初めてお会いしたのは、日英教育研究フォーラムの創設と関わって、鈴木慎一さんほか何人かと早稲田大学で会合した折りであったかと記憶する。第1回日の研究大会の開催が1992年夏だったから、その少し前であったかも知れない。定かではない。以来、鈴木慎一さんが「代表」を、大田直子さんが「事務局長」を引き受け、絶妙のコンビを組んだ二人を先頭にフォーラムは船出した。以後、会の名称は「日英教育学会」と変わりながらも20年の歴史を刻むことになる。2002年秋から「代表」は上田学・現代表に引き継がれたが、「事務局長」の大田さんは留任とされた。

学会は、規模の大小、会員数の多少とは無関係に、備えるべきとされる要件は満たさなければならぬ。少なくとも年1回の総会と会員が研究成果を発表する機会を設けるほか、学会内部組織の規程作成、諸事業の企画と実施、学会誌・ニューズレターの発行など、である。フォーラム発足当初から「運営委員会」の委員の一人として、非力ながらも、会則の制定や学内組織の検討、そのほかの諸事業の計画・実施にも関わったが、鈴木代表と大田事務局長の「三面六臂とか八面六臂」とも形容される獅子奮迅の活躍には、その場に居合わせた誰もが脱帽せざるを得なかった。綿密な計画と周到な準備に基づく、実現可能性の高い「代表・事務局長」執行部の諸提案が、運営委員各位の賛同を得るに難渋することはほとんどなかった。

大田さんが、優れた研究者であり、学生を大切にできる教育者でもあり、加えて秀でた事務処理能力の持ち主であることを知ったのは、フォーラムが発足してから暫く経ってからのことである。会則に規定する目的「イギリス教育の研究を多角的に発展させ、日本の教育の進展と日英両国の教育研究者の交流および両国の親善に貢献することを目的とする」に添った「事業」として、以下のことが合意された。(1) イギリス人研究者を招聘して講演会・シンポジウムを開催する、(2) プリテッシュ・カンシルの協力を得て、日本人教育研究者から候補者を公募し、選考のう

エイギリスでの滞在研究の補助金を支給する、(3) 会員の総力を挙げて「イギリス教育事典」を編纂・刊行する。無論、代表・事務局長を中心に、会員各自がそれぞれの分担にしたがって事をすすめた。しかしながら、各「事業」の企画・実施の総帥として指揮を執ったのは、代表と事務局長であり、責任を持って実行したのもこのお二人であった。

私のささやかな事務局経験<sup>1</sup>からしても、これは大変な難事業であることは明らかなことであった。学会代表は無論のことであるが、具体的な実務については大田さんが当たった、と言ってよかろう。(3) の教育事典編纂については、私は顧問と執筆分担者の一人であったが、総括事務担当ではない。しかし、毎号のニューズレターその他の連絡情報や仄間によって、大田さんの時間的、労力的、精神的な負担は相当に過重なものであったことが想像された。

私が大田さんを賞賛して止まないのは、かかる想像を遙かに超える事務局長の職務の重責を果たした上に、教育者としての学生指導に親身になって取り組み、さらに教育研究者として素晴らしい多くの業績を挙げられたことである。

5月8日午後にかかれた新宿・京王プラザ・ホテルでの「お別れ会」に出席した。そこで参会者に配付された「大田直子先生お別れの会」(お別れの会実行委員会作成)の冊子所収のご挨拶文やご遺族のお言葉のほか、とりわけ著作目録等を丹念に拝見して、研究者としても、また教育者としても稀にみる逸材であったことを改めて確認した。私がそれまでに知っていた大田さんは、まさしく「氷山の一角」に過ぎなかったことを、まざまざと思い知らされたのである。

旧知の黒崎勲さんから、当時帝京大学に勤務されていた大田さんが大学院では教育行政学科に学ばれたことを聞かされていて、いささかの親近感を覚えていた。個人的に親しく交流するということはなかったが、いずれ適当な折りに、教育行政学科の恩師のことなどを話題に個別にお話でもする機会を得たいものと思っていた。今となっては、ついにその機を逸してしまったのである。残念至極と言うほかない。

青木研作さんからの訃報をうけて、咄嗟に思いついたのがご遺族宛の手紙であった。弔電では十分にお伝えできない「弔意」を、せめてご遺族にお伝えしたく考えたのは、このような思いがあったからである。7月の下旬、大田さんのお姉様、中野郁子様から真にご丁寧な封書を頂戴し、おおいに恐縮した。文面からは、ご家庭での大田さんの明るく快活な生活の一面が十分に伺えた。「お別れの会」の会場に飾られた遺影を思い出し、あらためて冊子所収のいつもと変わらない「笑顔」に往時を偲んだ。

この遺影とは別に、大田さんを真ん中にして撮った、今となっては限りなく貴重な1枚の写真<sup>2</sup>が私の手許にある。1999年3月23日午後のことである。早稲田大学国際会議場の一室で開かれたイギリス教育事典編集委員会の会合終了後に、リーガロイヤルホテル早稲田1階のガーデンラウンジに移動して、翌日に渡英する大田さんの壮行を兼ねて、有志数人で軽食を撮った。リーガロイヤルホテルのラウンジ入り口ドアを背景にした写真である。私が携行した小型カメラで

の撮影であったが、後日に写真に収まった一人一人には「焼き増し」分を郵送させていただいた。写真に収まった方々のお手元には、黒の外套、黒の帽子姿の大田さんを囲んだ写真が保存されている筈である。在りし日の大田さんを偲ぶ縁（よすが）となることを願っている。

最後に、大田さんの早世を悼む言葉を述べさせていただきたい。

いささか弔辞めいた表現をすれば、大田直子さん！ あなたは、持ち前の明るい、快活で気配りのできるお方で、いつも前向きで、意欲的に物事に対処しておられました。私たちは、あなたのにこやかな笑顔と誠実に何事にも取り組んでいたその姿を忘れることができません。日英教育学会事務局長として20年もの長きにわたり、歴代代表を支え、学会の発展に大きく貢献されました。教育研究者としての数多くの優れた業績、大学教師としての学生に対する温かい親身の指導、同僚教員に及ぼす秀でた感化力、共同研究での卓越した指導力、そのいずれをとっても、あなたは稀に見る「逸材」でした。

どうか、あの世にあっても、日英教育学会の動静を見守り、よろしくお導きいただきたくお願いいたします。学会員の一人として、あなたの早世を悼み、ご冥福を心からお祈りして、謹んで哀悼の意を表させていただきます。合掌。

- 
- 1 1977年から凡そ20数年間、日本比較教育学会の常任幹事、後に常任理事、全国理事に選ばれて事務局実務を担当した。1980年開催の世界比較教育学会第4回東京大会の組織委員・事務局員の折りには、国際連合・教育局（IBE 在ジュネーブ）はじめ各国比較教育学会事務局との相互連絡、招聘外国人研究者への対応——講演会・シンポの開催、歓迎会開催、関係者との面会の設定と随伴、報告書の作成など——に忙殺された。東京大会終了後も外国人研究者来日に伴う事務局実務を10年余り担当した。
  - 2 大田さんを真ん中にして横並びに立った5人の集合写真である。向かって左手に小澤周三さん（東京外国語大学）と望月重信さん（明治学院大学）、右に鈴木慎一さん（早稲田大学）と木村浩（城西大学）が並んでいる。シャッターを押してくれたのは、事典編集委員会と大田さんの壮行会にも参加されていた柿内真紀さん（鳥取大学）ではないかと思うが、確かではない。